

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を含めたものです。

Vol.21 2011年3月号

- 絵本の良さと危うさ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤島 省太
- 熊とクマとくま・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博
- 「ピロードのうさぎ」の温かさ・・・・・・・・・・・・・・・・千葉 努
- 「しあわせのまほう」をかける言葉の力を教えてくれるこの一冊・・・畑山 亜里沙
- 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博

絵本の良さと危うさ

藤島 省太

今回、原稿依頼をいただき、久々に書店の絵本コーナーを覗いてみた。昔とは較べものにならない色鮮やかな絵本が並び、ひときわ華やいだ雰囲気があるところにはあった。内容も、私の子ども時代にはなかったキャラクター、アニメ、抽象画など様々で、絵本に魅入ってしまった。

絵本には、擬人化した動物が登場する作品も多い。何故動物なのか素人の私にはわからないが、おそらく動物に由来する象徴性や虚構性・ファンタジー性などの意味と、人間を登場させたときに生じる現実性や辛辣さを緩和する効果があるようにも思う。他方、人気キャラクターを主人公とした名作絵本などは、商業趣味が鼻につくこともある。



おとなのための絵本は、物語性や絵の抽象性による癒し効果をもつものが多いように思われる。一方、子どもにとっての絵本は、わかりやすく話を展開し、言語表現の豊かさや物語性、言葉で伝えきれない想像性を育み、情操を育てるには格好の素材であると思う。

しかし、そうした長所とはうらはらに、予め視覚的に絵が提示されることによって、想像力の入り込む余地がなくなり、イメージが固定化することはないのだろうか。言葉を媒介とした物語のイメージは、受け手の想像力に委

ねられている。それ故、一人ひとりが違ったイメージをもつことが可能となる。もし、イメージが固定化されてしまうと、新たな想像性や発想も生まれにくくなるというのは杞憂であろうか。最近の子どもの人物画がアニメの主人公のように描かれるということは決して笑えない話で、イメージの固定化が個性の埋没を物語っているようにも感じられる。

そんなこともあってか、私はごく身近な子どもの生活世界を描いた絵本が好きである。『はじめてのおつかい』という絵本は、初めて経験するドキドキ感が原体験のように共有され、主人公の心情を自分と重ね合わせてイメージできるようにも思う。また、私の子どもの頃のような懐古的な風景が描かれているせいか、温もりが伝わってくる作品である。

絵本とはやや異なるが、昔、紙芝居に熱中し、公園などで子どもたちに紙芝居を演じていた学生がいた。彼はしょうがいのある子にも紙芝居の楽しさを伝えたいと卒業研究に紙芝居を取り上げた。そして、あるお子さんに向け紙芝居を実演してもらった際、あまりの迫真の演技にお子さんは怖くなってしまい、「もうやめようよ...」と言って舞台の扉を閉じてしまった。そこで私が代わって演じてみせると、そのお子さんはじっくり最後まで紙芝居を観てくれたことがある。そこで彼が学んだことは、紙芝居もその時々の子どもの表情などを読みとり、関係性を大切にしながら演じるということだった。どんなに素晴らしい作品であっても、それを介したやりとりに相手を思う気もちや言葉かけがなければ、生きた絵本にはならないように思うのである。

「はじめてのおつかい」 / 筒井頼子・作 / 林 明子・絵 / 福音館書店

(特別支援教育講座)

絵本に描かれる動物が数多くあるのは言うまでもありません。中でもクマは際立って多いと言えます。なぜそんなのかを問うことで、クマとはどのような動物なのか、どのような受け止め方をされているのかが見えてきます。

森の中、積もった雪の上に「てぶくろ」が片方落ちています。エウゲーニー・M・ラチョフ絵・うちだりさこ訳『てぶくろ』(福音館書店)の始まりです。くいしんぼねずみが、ぴよんぴよんがえるが入ります。入れたとしてせいぜいそこまで、あとは無理と思われるところへ、はやあしうさぎが、おしゃれぎつねがやって来ます。「もうこれで四ひきになりました。」今度ははいいろおおかみです。「まあいいでしょう。」つづいてはきばもちいのしし。「ちょっとむりじゃないですか。」「ちょっとむり」の域ははるかに超えています。それでいて入ってしまう不思議さ、驚き。「もうこれで六ひきです。てぶくろはぎゅうぎゅうづめです。」やって来るのはのっそりぐまです。そこにあるのは、くまが群を抜いて大きいことへの共通理解。最後がくまでなければならぬのはそのためなのです。「まんいんです。・・・いまにもはじけそうです。」そう言いながら、くまは入ってしまうのです。ありを飲み込んだかまきりを飲み込んだむくどりを飲み込んだやまねこ、そのやまねこをくまが飲み込む、石井桃子作・中川宗弥絵『ありこのおつかい』(福音館書店)の最後もくまで。飲み込み、飲み込まれの最後は大きなくま、最後にくまを出さなければ終わらないのです。



「てぶくろ」の不思議は、最後にも用意されています。おじいさんが見つけたのは、くままでが入ることのできる巨大なものでなければならぬはずですが。しかし、見て驚いた形になっていないことから、落とした自分のてぶくろを見つけただけ、大きさに変わりがないのがわかります。くまの入る「てぶくろ」とおじいさんの「てぶくろ」が並列する、奇妙な感覚はそこから生まれているのです。



マイケル・ローゼン再話・ヘレン・オクセンバリー絵・山口文生訳『きょうはみんなでクマがりだ』(評論社)の始まりはクマ狩りです。草原へとやって来ます。「うえをこえては いかれない。したをくぐっても いかれない。こまったぞ! とおりぬけるしかないようだ!」次は川、次はぬかるみ、次は森、リズムカルな繰り返しの中、ページ右側にはいるはずのクマ、頭の中のクマが大きくなっていきます。見えていないからこそ大きさを増していくのです。見つけたほら穴で目指すクマと出会います。「クマ狩り」であるにもかかわらず、大慌てでもと来た道を戻ります。絵が小さく、連続した形になっていることによって、追ってくるクマの怖さが伝わってきます。家へと戻り、鍵をかけます。階段を上り、二階へと上がります。クマのいる地平と違った地平に、それによってようやく安心できるのです。ふとんをかぶることで安心感はより高まります。「ぼくらは もう クマがりなんかで かけない。」は安心できたからこそその言葉です。何倍もの大きな字でこれが強調されているのは、「絶対出かけない」、それでいて「必ずまた出かける」ことを示すためです。「きょうはみんなでクマがりだ」と勇んで出かけ、そしてまた逃げ帰るの繰り返しが見えています。行って帰るの繰り返しは、怖い、それでいて怖くないものの揺れ、熊がクマを越えてくまになる、もしくはその逆に、くまがクマを越えて熊になることの揺れそのものなのです。

神沢利子作・平山英三絵『ぼとんぼとんはなんのおと』(福音館書店)は、冬ごもりする母ぐまと子ぐまの話です。大きくて黒い母ぐま、その隣に生まれたばかりの双子の子ぐまがいます。外の世界を知らない子ぐまは、興味津々で問い掛けます。「ぼとん ぼとんって おとがするよ。ぼとん ぼとんって なんのおと?」「あれは つららの とけるおとよ。」「かあさん、はなが くすぐったいよ。なんだか いい においだね。」「はるかぜよ、ぼうや。」春になり、「ながい ふゆごもりの あなから、かあさんと ぼうやの くまは あかるい そとへ でていきました。」ここにあるのは季節の巡りの円環、冬ごもりするくまは円環とつながっているのです。『てぶくろ』は、くまが出てきたことによって元のとぶくろへと戻ります。『きょうはみんなでクマがりだ』は、クマに出会ったことによって、逃げ帰り、そしてまた出かけます。同じ円環がここにあるのです。



「てぶくろ」エウゲーニー・M・ラチョフ絵/うちだりさこ訳/福音館書店

「きょうはみんなでクマがりだ」マイケル・ローゼン再話/ヘレン・オクセンバリー絵/山口文生訳/評論社

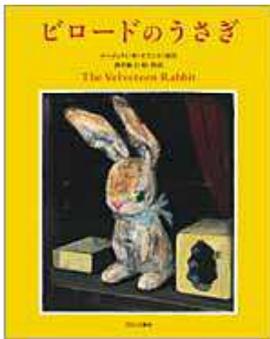
「ぼとんぼとんはなんのおと」神沢利子作/平山英三絵/福音館書店

(英語教育講座)

「ビロードのうさぎ」の温かさ

千葉 努

私の家には、小学1年生と保育所の年子の娘がいます。娘たちには、物心つく前から、寝る前に絵本を読み聞かせしてきました。寝る時間になると、3人で2階に上がり、部屋を暗くしてヘッドライトの明かりだけをつけて、一緒に布団に入って絵本を読み聞かせるのが我が家の毎日です。絵本を読んでいいな、と思うのは、子どもが、読めば読むほど絵本に感情移入できるようになることです。その絵本の世界を五感全部を使い、体全体で受け止めている感じがよく分かります。「～だとさ。おしまい」と言った後のほんの数秒の余韻を、娘たちながらに何かを感じて、かみしめている様子が伝わってくるのです。それが読むほどに深まっている気がします。



ある男の子にプレゼントされたビロードのぬいぐるみのウサギ。始めは見向きもしなかった男の子ですが、あるきっかけからそのウサギを大事にするようになります。寝るときも一緒、遊びに行くときも一緒。このぬいぐるみは、自分が本当のウサギと思っています。そして、自分がこの男の子に愛されていることを全身で感じ取っているのです。しかし、あるとき、男の子が連れて行ってくれた森で本物のウサギと出会い、自分が本当のウサギではないのでは、と考えるようになります。その後、男の子は伝染病にかかります。身の回りのものを焼いてしまうよう医者から言われ、お手伝いさんが部屋のものを片付けます。ビロードのウサギも袋に入れられ、捨てられようとしています。ビロードのウサギはそれまでの思い出を懐かしみ、とても悲しい気持ちでいました。そこに、妖精が現れたのです。

妖精はウサギに、「これからは だれもが あなたを ほんとうの うさぎにみえるように してあげる」と言って、魔法で本物のウサギにしてくれるのです。男の子はあるとき、野山をかけるウサギを見かけます。どこかで見覚えがあるような気がしながら、そのウサギを見つめる男の子が描かれ、物語は終わります。

娘たちは絵本を読んでいて、分からないことがあると「どうして なの？」とよく聞いてきます。この絵本を読んだときには、「どうしてウサギは捨てられちゃうの？」でした。それほどウサギに感情移入していたのだと思います。ウサギが捨てられそうになったときには、食い入るような目で見ていました。そして、物語が終わり、本を閉じた後、娘たちはほんのりした笑顔で私にぎゅーっと抱きついてきました。そのときの二人の表情は何とも言えないいいものでした。私が「ウサギさんよかったね」と言うと、「うん」と言ってはにかんだ笑顔をまた見せてくれました。

この絵本は、ストーリーはもちろんですが、絵の表情や雰囲気絵本の世界にとってもよくマッチしています。文章も、心理描写が細かく描かれており、読んでいくほど引き込まれる語り口になっています。「雰囲気のある」物語だと思います。この絵本を読んで以来、娘たちはお気に入りだったぬいぐるみによりいっそう思い入れを強くし、大事にするようになりました。家の大掃除をし、いらなくなった大量のぬいぐるみをこっそり処分しようとしていたところを見つかってしまい、私が悪魔の使いであるかのごとくに娘たちに責められたのも、娘たちのそうした思いを表しているように思います。

この絵本には、心を温かくし、子どもの思いを深めていく力があります。

「ビロードのうさぎ」 マージェリィ・W・ビアンコ・原作

／酒井駒子・絵・抄訳／ブロンズ新社

(附属中学校教諭)

「しあわせのまほう」をかける言葉の力を教えてくれるこの一冊

カール・ノラック文/クロード・K・デュボワ絵/河野万里子訳

『だいすきっていいたくて』(ほるぷ出版)

畑山 亜里沙

朝、ロラが目を覚ますと、口いっぱいですてきな言葉が広がっていました。「うれしいな。ほっぺがどんどんふくらんでくる。」ロラはすてきな言葉をパパに言おうとしました。でも、パパは仕事に行ってしまう。「ママ、あのね。」でも、ママはパタパタ大忙し。「またあとでね。」ロラはすてきな言葉をあげる人をさがします。スクールバスはうるさくて言えません。先生はおちびさんが独り占めして言えません。隣の席の男の子はすてきではないので、すてきな言葉は似合いません。お昼になるとロラはおしゃべりもせず、しずかにごはんを食べます。「いっしょにすてきなことばをのみこんじゃったらたいへん」そのあともロラは、すてきな言葉を誰かに言いたくてたまりません。お昼休みは、みんな遊びに夢中で言えません。帰り道、ロラはにっこり。フランキーになら、すてきな言葉を、一番すてきにプレゼントできそう……。ところがフランキーは、すてきな言葉を言う間もなく、びゅん！と行ってしまいました。帰りのスクールバスは、やっぱりうるさくて言えません。

すてきな言葉を言いたくても言えないロラは、怒ってふくれちゃいました。家に帰ると誰もいません。ロラはますますふくれっ面。すてきな言葉など、もう全然言う気になれません……。ふくれっ面のロラにはごはんはちっともおいしくない、レモネードだって変な味がします。ママとパパが気付きます。「どうしたの、ロラ？ママとパパにいてごらん！」でもロラは怒ったまま。(いわないもん。もうぜったい いわないもん。わたしのすてきなことば。)ところが、ロラのほっぺはどんどん、どんどん、ふくらんで……。大きな声が飛び出します。

「ママ、パパ、だいすきよ！だいすきよ！だいすきよ！」

ロラはすてきな言葉が言えました。ママとパパはロラを抱きしめ、頭をなで、キスをし……。ロラのすてきな言葉が、みんなに幸せの魔法をかけたのです。

ことばには、自分を変え、まわりの人を変え、幸せにする力が潜んでいる。これは、そんなことに改めて気付かせてくれる、ほのぼのと胸の温かくなる絵本です。自分のさりげない一言が、誰かにとっての「しあわせのまほう」になるかもしれません。ありふれた日常の中にたくさんの「すてきなことば」を見つけて、大切な人、周りの人に「しあわせのまほう」をかける、そんな素直で温かい心をいつまでも持ち続けたいと思います。

(英語コミュニケーションコース4年)

新刊紹介

いせひでこ『まつり』(講談社)

「大きな木よ。じっと記憶する木よ。おまえが見てきたものに、わたしは耳をすます。」いせひでこ『大きな木のような人』(講談社)で、そう木に語りかけたパリの植物学者、「きみの大きな木」から、さえらに手紙が届きます。「木の先生」が、秋10月に日本に来るのを知らせる手紙です。

やって来た「木の先生」は大きなカシの木に手を触れます。「おじいちゃんのおじいちゃん、この家を守ってきた」木です。おじいさんのおじいさん、そしておじいさんを見てきたその木が、さえらをいま見ているのです。「木の先生」に、芭蕉が「奥の細道」で旅した杉並木を案内します。芭蕉が目にした杉並木、同じものを見ることによって時間の重なりが生まれ、芭蕉とのつながりが生まれます。

「木の先生」に「ちんじゅの森のおまつり」を案内します。羽織、袴の正装したおじいさんに、「かっこいいですネ。いつもとちがいますネ。」と「木の先生」が声をかけます。違うのは、祭りの日には、いつもとは違った時間が流れるため。違ったものにするために、違った装いをするとも言えます。今年が「出番」の女の子は、自分の名前を提灯に入れてもらいます。さえらもその一人、「世界にたったひとつ、この日の自分が今夜、灯りにともされる」のです。「たったひとつ」が意味するものは、特別なもの、聖なるもの。手古舞の衣装をつけ、さえらが踊るハレの日です。

屋台が繰り出します。イチヨウヤトチ、ヤナギから作られる屋台は、その地に育った木が形を変えたもの、木に籠もった長い時間が屋台へと移るのです。「ここらで一番のじいさんケヤキが、葉のない枝をわさわさふるわせ、特別な日であることを告げています。「今夜、ちんじゅの森は、ねむりません。」

長い祭りの一日を過ごしたさえらは眠ってしまいました。「さえらは、どんな木に育ちますかね。……」そう言うのは、さえらをおんぶした「木の先生」と並んで歩くおじいさんです。おじいさんは庭師、さえらは庭師のおじいさんの孫なのです。

(藤田 博)

発行：宮城教育大学附属図書館